

すえた。どこでも痛い時、痛い所へ灸をすえる。

山本にはかつて鍼灸しんきうの商いをしていた家がある。昔は部屋いっぱいあるような大きな蚊帳かやの中に火鉢を入れると熱気で蚊帳がフワッと膨れ、その中で灸をしていた。結核の人がよく来ていたという。

三 温泉療法

温泉は病気を治すためばかりではなく、冬場の農閑期に食糧を持って一週間から十日ぐらい、親しい人と家族と一緒に一年の疲れをとるために行くことが多かった。椎田では次にあげる温泉場が人気があった。別府の鉄輪温泉は胃腸に効能あり、同じく別府の明礬温泉や山口県の俵山温泉は皮膚病に良い。豊前市畑の冷泉と臼杵の六ヶ迫温泉は胃腸病に効能があるといわれた。

第十章 民俗芸能

第一節 椎田町の神楽について

福岡県の東部、京築地方には数多くの神楽講（社）が昔から伝承されているが、ある時期から途絶えた神楽講も少なくはない。最近では農村部の過疎化と少子化で後継者を育成するのにも苦慮し、全国的な見地からも神楽に限らず、古くから培われてきたさまざまな民俗行事（芸能）が消えつつあるのは否定できない。

椎田町には、現在、小原神楽講、岩丸神楽講、湊神楽保存会、上り松神楽講の四つの神楽講がある。現在伝承されている神楽は、古くは神官によって舞われていた神楽が明治初期に神職世襲制度の廃止に伴って舞われなくなり、一般の氏子によって受け継がれたものである。そうしたなかで、あるところの氏子が神官から習得した神楽を各所に伝え、現在に至っていると考えられる。

神楽の演目と所作

俗に神楽には三十三番の演目があるといわれているが、豊前地方では、それを「式神楽」と「特殊神楽（奉

納神楽」とに分けている。しかし、それぞれの神楽講によって演目の数え方が異なり、同じ演目でも名称が異なっている。

次に、神楽の舞い方には当然のことながら順番があり、舞いの中の仕草一つ一つに言葉がある。神楽の基本はほとんどの舞いが「能」のように動作が「摺り足」で、ある動作から次の動作に移る際、右、左、右を繰り返して（この所作を「順・逆・順」または逆に「左・右・左」などと言う。また、左手に持った扇をくるくると翻してその手を大きく振り上げ、振り下ろす所作を「折り柳」「打ち込み」などとそれぞれ名称が付いている。その動作の呼び方も神楽講によって異なっているものが多いが、いずれの神楽も五方、つまり、東、南、西、北、中央を順番に拝みながら舞う。

舞いには一人舞い、二人舞い、四人舞い、六人舞いと演目によって舞い手の数が決まっており、複数で舞う演目はそれぞれの動作を合わせることに舞い手は特に気をつかう。

神楽には舞いを舞いながら唱える神楽歌（託、「口上」「文言」と言い、神楽講によって異なる）がある。神楽歌は後述しているが、和歌などは『万葉集』『古事記』『日本書紀』などの神話から引用しており、内容は口伝え、聞き覚えのためか明らかに誤っていると思われる神楽歌もないとは言えない。

また、小道具類についても「御先神楽」の「しかんじょう」は、神楽講によって、当て字や聞き違いか、「紙冠杖」「任官杖」「ニンカン杖」と異なっているが、それぞれの神楽講で記録にあるものを記した。

一 小原神楽（おばらかぐら） Ⅱ 椎田町大字小原

明治の初め、社家から民間へ神楽が伝承された際、小原の有志が隣の築城町伝法寺の内尾宮司から習得した神楽は、以来、戦時中神楽講員が少しは減少したが、一度も絶えることがなく、戦後は昭和二十七年、八年前、上り松神楽講員も加わり、さらにその数年後、地元の中学生らが、そして昭和四十六年、やはり地域の若者が古い形のままの神楽の伝授を受けた。その当時の講員は十五、六人であったが、古老が体調不良などで講員数がやや減少した。このため、子どもたちへの神楽伝承を思い立ち、九人の小原地区の小学生が集まった。

神楽の練習は毎晩のように小原正八幡神社の拝殿で行われた。主な演目は神楽歌（託せりふ）、囃子とも、約一か月で習得した。もちろん、狩衣、袴などの衣装も子ども用の物を取り揃え、地元の春の神幸祭、秋祭りや町内各地区、他市町村の祭り、各種のイベントに参加。次代の小原神楽の担い手として、大人になった現在も活躍している。また、平成七年、上り松の四十代の講員が新たに加わり、正式に神楽講員として練習に励んでいる。

第一節 椎田町の神楽について

また、平成十二年度から、地元の小原小学校では総合学習の一環として、郷土愛を培い、伝統芸能の存続に、月に一、二回ではあるが、神楽講員による指導で児童の神楽学習に取り組み、小学校での文化祭や、地域の春、秋の祭などで卒業生ともども、その成果を地域の人たちに披露し、有望な神楽後継者として期待されている。

神楽の中で唱える「神楽歌」は、前述のように「聞き伝え」「言い伝え」のため、誤った語句や意味不明な言葉が多い。そこでこの度、戦後間もないころ、当時の古老から聞き覚えて、書き留めていたものを文献や、古老からの聞き取りを参考に、なるべく正しいと思われる語句や漢字を用い、分かる範囲で書き直した。特に神名をはじめ、和歌などについても文献によって異なっているもので、無理に漢字を使わず、かな書きとした。

なお、すべての文言は、昔から小原神楽に言い伝えられているものを記述した（平成十一年十二月、椎田町無形民俗文化財指定）。

小原神楽の演目と所作・採物

式神楽

- 一、奠撒き（二人舞い）・神前に供えた米「奠（くましね）」を五方に撒き、神前を消める。
鳥帽子、狩衣、二股袴、三方、米
- 二、手草（二人舞い）・一人が笹の束を両手に持ち、「文言」を掛け合いながらの舞い。
鳥帽子、狩衣、二股袴、御幣、扇、笹の束
- 三、小神楽Ⅰ一の切りⅠ（四人舞い）・「文言」を唱え五方を拝みながらの軽やかな舞い。
- 四、小神楽Ⅱ二の切りⅡ（四人舞い）・「文言」を唱え五方を拝みながら軽やかに舞い文言は「一の切り」とは別。

- 五、花神楽（四人舞い）・「文言」を唱え五方を拝みながら艶やかに舞う。文言は別。
鳥帽子、狩衣、二股袴、御幣、扇

- 六、剣・返閑（六人舞い）・剣を持った五人の神が土地をめぐる争い、それをなだめる神主（地割）とが掛け合いながらの舞い。最後に地割が返閑を舞い、その場を鎮める。

（地割）・毛頭（しゃぐま）、千早、裁着（たっつけ）袴、太刀Ⅱ木・火・金・水の神

毛頭、狩衣、袴（たすき）、裁着袴、御幣、扇、太刀Ⅱ土の神

鳥帽子、狩衣、二股袴、御幣、五行幣Ⅱ地割（神主）

鳥帽子、狩衣、二股袴、御幣、扇Ⅱ地割（神主）

- 七、御先（二人舞い）・一の切り、二の切り、三の切りとあり、一の切りのことを「注連切り」ともいう。「鬼（猿田彦）」と「神主」が向かい合ってお互いを敬遠しながら舞い、やがて神主は「退場」し、鬼が囲まれた注連縄を切る。その途端に神主が出て来て鬼を捕まえ退場させる。

二の切りは俗に「暴れ鬼」ともいい、神主と鬼とが手に持った御幣と紙冠杖とで打ち合い、神主から逃れた鬼は観客の中に跳び込んで暴れまわる。そのうちに、さらに数人の鬼が出て来て暴れるが、時を見計らって神主が鬼たちを取り押さえる。三の切りは、神主と鬼がにらみ合い鬼が暴れるが、神主と鬼が「文言（口上、

託」を言い合つて鬼をなだめ「説得」。鬼は降参して退場する。

(注連切り)・烏帽子、狩衣、二股袴、御幣、鈴||神主

毛頭、狩衣、二股袴、扇、御先面、紙冠杖(しかんじょう・鬼杖)||鬼

(二の切り)・烏帽子、狩衣、二股袴、御幣、鈴||神主

毛頭、狩衣、二股袴、扇、御先面、紙冠杖||鬼

(三の切り)・烏帽子、狩衣、二股袴、御幣、鈴||神主

毛頭、狩衣、二股袴、扇、御先面、紙冠杖||鬼

八、岩戸(四方鬼・岩戸開き||五人舞い)・天照大神が天の岩屋に閉じ籠つたため世の中が真つ暗になり、困つた神々(太玉命、思兼命、伊勢理度売命、天宇受売命、手力男命)がそれぞれ岩屋の前で舞いを舞い、文言を唱え、最後に大男の手力男命が力任せに岩戸を開け、元どおりの明るい世界が開く。

毛頭、千早、二股袴、紙冠杖||鬼

烏帽子、狩衣、二股袴、扇、笹、翁面、御室||思金命

烏帽子、狩衣、二股袴、扇、御幣、面||太玉命

烏帽子、狩衣、二股袴、扇、御幣、面、笹||伊勢理度売命

狩衣、袴、姫面、瓔珞||天宇受売命

毛頭、狩衣、裁着袴、扇、御幣、面、襷布||手力男命

奉納神楽

一、乱れ御先(二人舞い)・神主と鬼の舞い。鬼が激しい動きで舞う。前記、式神楽の御先「二の切り」に似ている。

烏帽子、狩衣、二股袴、御幣、鈴||神主

毛頭、狩衣、二股袴、御先面、紙冠杖||鬼

二、網御先(四人舞い)・神主と網持ち(二人)が暴れる鬼を網で捕らえる神楽で、他の御先神楽と違い、鬼の舞いの仕草がひょうきんで、観る者の笑いを誘う。

毛頭、千早、二股袴、網(引き布)||網持ち(二人)

烏帽子、狩衣、二股袴、御幣、鈴||神主

毛頭、狩衣、二股袴、御先面、紙冠杖||鬼

三、一人剣(二人舞い)・数枚の白紙を口に、手には刀を持って舞いながら口に咥えた白紙を左手で二つ折りにし、それを刀で切る。二枚が四枚に、四枚が八枚に、だんだんと小さく切つて、最後は紙ふぶきとして拝殿に撒く。刀使いが難しく、後継者は少ない。

毛頭、千早、二股袴、太刀、白紙

四、盆神楽(二人舞い)・直径約二〇センチほどの盆の底を両手でそれぞれ支え、初めは空のままで、五方を拝みながら舞い終えた後、盆に米を入れて速いテンポで舞う。盆の米をこぼさないように舞うため、高度な技術を要する。

五、神迎え（二人舞い）・鬼が御輿の先導役となり、神を迎える。
 烏帽子、狩衣、襷、二股袴、扇、御幣、盆（二）、米

六、御遷宮神楽（七人舞い）・神社の新築、改築や御輿の購入、修理などをしたときのみに舞う神楽で、他の神楽と違い、神社の外（境内）で舞い手は神社の五方を囲むような配置で舞う。

（神域清め）・毛頭、千早、二股袴、太刀Ⅱ太刀持ち

（四方祓い）・烏帽子、狩衣、二股袴、襷、弓矢Ⅱ弓持ち

（四方祓い）・烏帽子、狩衣、二股袴、襷、弓矢Ⅱ矢持ち

烏帽子、狩衣、二股袴、御幣、鈴Ⅱ神主

毛頭、御前面、狩衣、二股袴、紙冠杖Ⅱ鬼

毛頭、千早、二股袴、太刀Ⅱ太刀

毛頭、千早、二股袴、太刀Ⅱ小太刀

烏帽子、狩衣、襷、二股袴、薙刀Ⅱ薙刀

七、大蛇退治（六人舞い）・小原では終戦直後までは舞っていたが、現在は舞っていない。「湊神楽（金富神楽）」の項参照。

「面」の種類と数

・鬼面（御前面など五個・赤）

・翁面（二個・薄茶色）

・手力男面（一個・薄茶色）

・天宇受売（姫面二個・白）

○囃子用……胴長太鼓、横笛、鉦

八、湯立神楽（三人舞い）・鬼（猿田彦）が丈の高い孟宗竹に昇り、先端の御幣を切り落とす神楽で、神楽のなかでは一番熟練を要し、最も危険を伴う。小原では終戦直後までは舞っていたが、現在は舞っていない。

神楽の囃子

神楽には囃子がなくては成り立たない。囃子は三種類の楽器を使う。横笛・太鼓・鉦（チャンカラ、またはジャンガラともいう）。横笛はメロディーを、太鼓と鉦はリズムを受け持つ。それぞれの楽器を使う囃子方は神楽を舞えなくても神楽の舞いの順番を熟知していなければ演奏することができない。なぜならば、神楽の各演目の所作、仕草、速さに合わせて数十種類のフレーズ（音階）を、その場、その所作に合わせてメロディーを奏し、あるときは適当なアドリブ（即興）を加え、舞い手は囃子に、囃子方は舞い手にお互いがまさに「阿吽の呼吸」で舞いを進めて行く。

「地割神楽」「御先神楽」「大蛇神楽」などの演目は正式に舞えばそれぞれ一時間近くかかり、囃子方は途

中で交代しなければ体力を消耗して続かないくらいである。交代要員のいる神楽講ではあまり苦勞しないが、交代要員がない場合は大変である。

昔から伝承されてきた神楽囃子は「聞き伝え」のため、神楽講によつては明らかに「拍子抜け」してゐると考えられる部分もないとは言えないが、それはそれで伝承していかなければならない。

囃子を感じるには、大変な時間(年月)を要する。神楽を観る方からすれば、西洋音楽のように楽譜を書いてそれを練習すればよいのでは、と思う人もいるが、神楽囃子は日本音楽独特の「土俗的」なメロディー、リズムで曲全体ができており、西洋音楽のように例えば「四分の四拍子、四分の三拍子」、「強弱強弱」というようなメロディー、リズムでは一部を除いてできない。囃子のできる人の神楽本番で、囃子そのものを「体心」に記憶させて覚えることが肝要である。幸い、現在は囃子を録音できるので本番の際に録音してそのテープを何回、何十回となく聞いていれば、笛、太鼓、鉦そのものはできなくてもメロディー、リズムは意外に早く体に入る。後は笛の吹き方、太鼓・鉦の打ち方の稽古を積み重ねれば人によつて多少覚える期間は異なるが、自然と覚えていく。

以上のようなことで、神楽の舞いそのものは上手な人とそうでない人があるものの、囃子に比べれば短期間で習得できるが、囃子は前述のように覚えるのに長期間を要する。

神楽用の太鼓は主に神社備え付けの物を使うことが多く、大きさは胴長太鼓で直径(打つ皮の部分)が一尺七寸から一尺八寸(約五二センチから五五センチ)で、胴の部分は櫨材がほとんどである。鉦は真鍮製で直径七寸(約二二センチ)の物が多い。笛は六穴で、音の高さ、いわゆる「キー」は西洋音楽でいうフラット(♭)四つの「変

イ長調」に近い。ほとんどが手作りである。

太鼓、笛、鉦の囃子三拍子と舞い手の呼吸がびたりと合った時の神楽は、囃子方、舞い手、観客の気持ちが一つになつてみんな心地よいものである。

小原神楽の口上「託」

手草(たぐさ) 二人舞い

二柱 御祖の神ぞ玉鉦の 世の中の道始め給え

万代と 波は立ち来て洗えども 変わらぬものは石の色かな

〔唱教〕

(右) 一、御手草を 手に取り持ちて拝すればや

(左) 二、御手草の なりへの国は伊勢の国

(右) 三、白和幣 手草の枝も取りそうてや

(左) 四、笹の葉に 雪降り積もる冬の夜は

小神楽(こかぐら) 一の切り 四人舞い

万代と 波は立ち来て洗えども 変わらぬものは石の色かな

天つ神 国つ社を祝いてぞ 我が葦原の国は治まる

万代と 波は立ち来て洗えども 変わらぬものは石の色かな
 榊葉や 立ち舞う袖の追い風に 靡くや神の心なるらん
 万代と 波は立ち来て洗えども 変わらぬものは石の色かな
 吹き立つる 庭火の前の笛の音は 天の岩戸もさこそなるらん
 万代と 波は立ち来て洗えども 変わらぬものは石の色かな
 五十鈴川 清き流れの岩真水 行く末永く仕え奉らん

小神楽（こかぐら） Ⅱの切りⅡ 四人舞い

やすみしし 吾が大君の高光る日の御子の 荒栲の藤井が原の大御門に 始め賜いて埴安の堤の上に在り
 立たし 見し給えば大和の背背山（背香久山）は日の経ての大御門に 春山と茂みさび立てり名細しき吉野
 の山は影とももの大御門に 雲居にぞ遠くありけり高知るや天の御蔭の天知るや日の御蔭の水こそはとこし
 えならぬ天（御井）の真清水

この神楽歌は、万葉集の巻第一 「藤原の宮の御井の歌」 から引用しており、ほとんどの神楽歌にも言
 えると思われるが、囃子のリズムに乗って唱えるため、助詞や語呂がやや原文と異なっている。原文は次
 のとおり。

やすみしし 我が大君 高照らす 日の御子 荒栲の 藤井が原に大御門 始めたまひて埴安の堤の上
 に あり立たし 見したまへば 大和の背背山は 日の経の 大御門に 春山と茂みさび立てり 畝

傍の この端山は 日の緯の 大御門に 端山とやまさびいます 耳成の 背背山は 背面の大き御門
 に よろしなへ 神さび立てり 名ぐはし 吉野の山は 影面の大き御門ゆ
 雲居にぞ 遠きありける 高知るや 天の御蔭 天知るや 日の御蔭の 水こそば とこしへにあらぬ
 御井の清水

Ⅱこれより「唱歌」Ⅱ

千早振る こも高天の原なれば 集まり給え四方の神々
 天つ神 国つ社を祝いてぞ 我が葦原の国は治まる
 榊葉や 立ち舞う袖の追い風に 靡くや神の心なるらん
 五十鈴川 清き流れの岩真水 行く末永く仕え奉らん

東方を守護し給う御神は 久々能智の神と申し奉る
 南方を守護し給う御神は 迦具土の神と申し奉る
 西方を守護し給う御神は 金山彦の神と申し奉る
 北方を守護し給う御神は 水花売の神と申し奉る
 中央を守護し給う御神は 埴安の神と申し奉る

一、おうだいごろう 数多の剣を持ち給う

二、そもそも御祖に神在します
三、三玄 三妙 神道加持

花神楽（はなかくら） 四人舞い

子 祈事に 誠しあらば 天地の

丑 後ろにも 前にも神の在します

寅 とらわてに ゆらゆら八尺の勾玉をや

卯 現にも 夢にも 更に忘れなば

辰 立つ時もある時ただ 神の在します

巳 御注連縄 かけて誠を尽くしなば

午 生まれたる 神の御国の道なれば

羊 羊を秋 二千しの穂に出て

申 猿田彦の教えの如く 謹なば

酉 鶏が鳴を 聞きなば起きて 身をそそぐ

戌 いぬる間も 来る間も神の在します

亥 五十鈴川 清き流れの岩真水 行く末永く仕え奉る

東方を拝み奉れば 甲乙が方なり

この方に神在します 御名をば 久々能智の神と申し奉る

花の経廻まいらせむ 今をしようめにうきおさめ奉る

南方を拝み奉れば 丙丁が方なり

この方に神在します 御名をば 迦具土の神と申し奉る

花の経廻まいらせむ 今をしようめにうきおさめ奉る

西方を拝み奉れば 庚辛が方なり

この方に神在します 御名をば 金山彦の神と申し奉る

花の経廻まいらせむ 今をしようめにうきおさめ奉る

北方を拝み奉れば 壬癸が方なり

この方に神在します 御名をば 水花売の神と申し奉る

花の経廻まいらせむ 今をしようめにうきおさめ奉る

中央を拝み奉れば 己が方なり

この方に神在します 御名をば 壇安の神と申し奉る

花の経廻まいらせむ 今をしようめにうきおさめ奉る

剣神楽（地割） 返間 六人舞い
（土の神）



花神楽

そもそも天に在つては初め氣を運び 五星の初めの細しき神を配つて然も之を行ひ給ひ 地に在つては某土の神と現われ 先ず東をば甲乙と言うなり 南は丙丁と号す 西は庚辛と言うなり 北は壬癸と号す 中は戊己と言うなり 斯くの如く五方五行に神在しますと雖も吾等には四季の所望なく速やか配分を定むべし

(木の神)

土の神 汝さほど長き事曰うかな 父二柱に況や今に於いて少しの所望なるまじく候

(土の神)

所望なきとは如何に仰せ候ども此処に数多の喙あり 天なくして雨降らず 地なくして草木生ぜず 四方なくして風吹かず 父なくして種おれず 母なくして生まれ来たらんと申す 万物土より生じて土に還らんと云う事なし 然らばどとく しよおうの所望相給わらで叶うまじく

(木の神)

残る三柱の神も聞き給え この者幼なき時より斯かる兵乱を企み いざ四方より勢をなし 太刀の刃風を以つて土の神を討つ取らん

(地割)

聲しし 木の葉の下に細水 鳴りを鎮めて言の葉を聞け これは益なき兵乱をいざさせ給うものかな

先ず先ず鎮まり給え 仔細は某申し計らい奉らん

先ず國の興りを静かに語り奉らん そもそも天神七代 伊邪那岐 伊邪那美命 天の浮橋の上に立ちて

曰わく 底つ下に豈國ならんやと曰いて天の瓊矛を挿し降ろし 青海原を潮こおろこおろに掻きなし給え ば矛より垂る潮 自ら凝りて島となる 名付けて淤能基呂島と言うなり 天神二神この島に天降りまして國土及び八百万の者を産み給う 神皇勅して曰く 汝葦原に降り じせい陰陽五行の理を和らげ天地に大変なく悪魔降伏を鎮めよとの神勅を蒙るにより 日蔭の糸を頭に懸け 白妙の御幣を捧げて天の岩屋を離れ 遙々の方を眺むれば 案の如く五神は五方に斬り闘つて御座します 如何んや五行の神これ某の儀に非ず 神勅帶し来り 先ず先ず鎮まり給え仔細は某申し計らい奉らん

先ず木の神に申すべき事の候
春三月九十日の内より十八日を抜き出し土用と号し土の神に奉る 残る七十二日のところを守護し給え
火の神 夏三月九十日の内より十八日を抜き出し土用と号し土の神に奉る 残る七十二日のところを守護し給え

金神 秋三月九十日の内より十八日を抜き出し土用と号し土の神に奉る 残る七十二日のところを守護し給え

水神 冬三月九十日の内より十八日を抜き出し土用と号し土の神に奉る 残る七十二日のところを守護し給え

土の神も聞き給え 四節四土用を合わすれば これも七十二日にて候 このところを守護し給いて剣を鞘に収め 御鎮まり候

(土の神)

五行共に七十二日と仰せ候えども我等には四節の端々を賜わり この上の神勅を御開き候
 (地割)

これは大乱 重ねて承らん

ほのぼのと 峰より出する有明を 余所の月ぞと人や見るらん

只今詠じ候 和歌の如く 同じ雲居の月を余所の月ぞと眺むるが如し さり乍ら五行の神の御心一致に御座しまさずして葦原の國 安く穏やかにすむべからん さり乍ら土の神に奉る 十九日と祭日とを合わせ 未代祭り奉らん 之に依つて御領まり候

(土の神)

恐まつて候

(地割)

目出度く候 人間四方の素性土仕えのため申し渡さん 四節四土用の間日を御伝え候

(土の神)

春来れば 酉巳の山に午ぞ伏す 夏の巳辰は卯申なりけり 秋も酉未の歩みに如何なれば 冬寅卯巳に激

しかるらん

(地割)

激しかるらんとてもの事に八専の間日を御伝え候

(土の神)

大龍牛馬と知ろ示せ

(地割)

げにげに犬は戌 龍は辰 牛は丑 馬は午 然るに於いて未代のため申し渡さん

先ず木の神 青き方に在す青き御幣奉る 七十二日の境に出し 春三月の守護神と御成り候

火の神 赤き方に在す赤き御幣奉る 七十二日の境に出し 夏三月の守護神と御成り候

金神 白き方に在す白き御幣奉る 七十二日の境に出し 秋三月の守護神と御成り候

水神 黒き方に在す黒き御幣奉る 七十二日の境に出し 冬三月の守護神と御成り候

土の神 黄き方に在す 黄き御幣奉る この歩み正しく 三玄三妙三行加持と 踏み領め候

これより神主(地割) 返開を舞う。

御先神楽(みさきかぐら) 注連切り・二の切り・三の切り 二人舞い

「三の切り」のみに「口上」あり

(神主)

静かなれや 静かなれや 豊國の中 尚静かなれや御神屋の中 神道や千道 百道多くとも 中なる道は

神の通い路

(猿田彦「以下「鬼」と記す」)

神道や 千道百道多くとも 中なる道は磨呂が通い路

(神主)

なにわさや 難波の葦や葦原の 国のはじめに道は一筋

(鬼)

知らずして 踏み迷いぬる神路山 今新まる道は一筋

(神主)

謹上再拜 謹上再拜 それ歳月 年号始まつてよりこの方 国家四民安静のため 四季の御祭りを致さんと欲し 同じ四方に同じ注連縄を張り 八ばし百取り机八百萬の神饌を講じ その中に八人の八乙女五人の神 神楽男を揃え 国家四民安静のため 加持一方とするところ これ丑寅に当たり 悪風颯々と吹き来れば赤き色なり 大魔王この御神屋のうちより勢を成す それ我が国は神国なり 国主は一神皇なり 汝何者の形を現わす この神前に近づく事不敬なり 速やかに退散せよ

(鬼)

そもそも御先と言うは一ざ神命の分身なれば人と見えぬも道理なり 眼は赤酸醬の如く 鼻は七咫 三尺三寸の紅舌を以て凡体を喰わんとするに似たり されどその容貌美なりと雖も 心上を知るべからず 一心清浄なるに如かんや御先の威風神力を以て温潤旁魄の愛を現わし 或る時は木石木竹に身を替え前には赤き天衣を懸け 腰には黒き紋を纏い 紙冠杖を引ひ 提げ天地の間を飛行し すれば国こそ多けれ 豊の前州 築上の郡 当社の珍の広前に太鼓鞆鼓 笛 鼓 十二の楽を四季に四季も映えてとくと踏ません何ぞと詠えかな 給う事謂れなし斯程の神事企つるほどの事なれば三日前より荒神としてこそ現れ祭



御先神楽

るべき 四面八方の神境は 許すまじく候

(神主)

御先の神に疑いなく 神宝の五十鈴を生じて天上の御神楽を守護し給え

(鬼)

げにげに神主の教えに任せ 五十鈴を振り立て執行しむれば 温潤柔和なり 依って紙冠杖を渡し 御先に控え奉らん

(神主)

紙冠杖を渡し印においては天下泰平 国家安全 五穀成就 (地名) 氏子繁盛を舞い鎮め候

岩戸(いわと) 開き 五人舞い

(太玉命)

只今 岩戸の広前に太玉命とは如何なる神命にて在しますや

(思金命)

太玉命には天上の御神楽を守護し給え

(太玉命)

恐ま^{かしこ}つて候^{そうろう}
(伊斯許理度売命)
只今^{ただいま} 岩戸^{いわと}の広前^{ひろまえ}に伊斯許理度売命^{いしこりどめのみこと}とは如何^{いか}なる神命^{しんめい}にて在^ましますや

(思金命)
伊斯許理度売命^{いしこりどめのみこと}には天上^{てんじょう}の御神楽^{みかぐら}を守護^{しゆご}し給え
(伊斯許理度売命)
恐ま^{かしこ}つて候^{そうろう}
(天宇受売命)
只今^{ただいま} 岩戸^{いわと}の広前^{ひろまえ}に天宇受売命^{あめうすめのみこと}とは如何^{いか}なる神命^{しんめい}にて在^ましますや

すや
(思金命)
天宇受売命^{あめうすめのみこと}には詔^{みことり}をのし給え
(天宇受売命)
恐ま^{かしこ}つて候^{そうろう}
(手力男命)
只今^{ただいま} 岩戸^{いわと}の広前^{ひろまえ}に手力男命^{たからおのみこと}とは如何^{いか}なる神命^{しんめい}にて在^ましますや



岩戸神楽

(思金命)
手力男命^{たからおのみこと}には天^{あめ}の岩戸^{いわと}を開^{ひら}き給え
(手力男命)
千早振^{ちはやぶ}る 御簾^{みす}の中^{うち}こそ茂^{しげ}にけれ 岩戸^{いわと}を開^{ひら}いて表白^{おしろ}さや
(思金命)
暫^{しばし}して 端山^{はやま}繁山^{しげ} 繁^{しげ}るとも 神路^{しんじ}の国^{くに}に道^{みち}はあるものかな
(手力男命)
三十一^{さんじゅういち}字^じの言^{こと}の葉^はを連^{つら}ね奉^{たてまつ}れば大神宮^{だいじんぐう}の御心^{みこころ}も和^{やわ}らぎ 戸^とも細^{ほそ}め開^あく様^{よう}に覺^{おぼ}え候^{そうろう}

御遷宮神楽^{ごせんぐうかぐら}(神迎え) 六人舞^{むにび}い
御先^{ごみさき} 此れより東方^{とうほう}に向^{むか}つて気^きあり 気^きなし
大太刀^{おおたち} 魔^まあり 魔^まなし
弓^{ゆみ} 惡魔降伏^{あくまこうふく} 惡魔降伏^{あくまこうふく}
御先^{ごみさき} 此れより南方^{なんぽう}に向^{むか}つて気^きあり 気^きなし
小太刀^{こたち} 魔^まあり 魔^まなし
弓^{ゆみ} 惡魔降伏^{あくまこうふく} 惡魔降伏^{あくまこうふく}
御先^{ごみさき} 此れより西方^{さいほう}に向^{むか}つて気^きあり 気^きなし

御先^{ごみさき} 此れより東方^{とうほう}に向^{むか}つて気^きあり 気^きなし
大太刀^{おおたち} 魔^まあり 魔^まなし
弓^{ゆみ} 惡魔降伏^{あくまこうふく} 惡魔降伏^{あくまこうふく}
御先^{ごみさき} 此れより南方^{なんぽう}に向^{むか}つて気^きあり 気^きなし
小太刀^{こたち} 魔^まあり 魔^まなし
弓^{ゆみ} 惡魔降伏^{あくまこうふく} 惡魔降伏^{あくまこうふく}
御先^{ごみさき} 此れより西方^{さいほう}に向^{むか}つて気^きあり 気^きなし

薙刀 魔あり 魔なし
 弓 悪魔降伏 悪魔降伏
 御先 此れより北方に向かって気あり 気なし
 神主(御幣) 魔あり 魔なし
 悪魔降伏 悪魔降伏
 御先 此れより中央に向かって気あり 気なし
 四方全員 魔あり 魔なし
 悪魔降伏 悪魔降伏

*神主、御先は、以下「御先神楽」に同じ

一一 岩丸神楽 榎田町大字岩丸

豊前地区には現在、神楽の講はあるが、その神楽は必ずしも同一というわけではなく、たとえ同一のもので土地が異なるにつれて、いくらかずつ異なっている。

岩丸神楽について考えると、葛城神社(妙見宮)の御縁起に、人皇七十二代白河院の御宇、永保二年(一〇八二)壬戌五月の大旱魃に、神主藤原時人郡長の命により、妙見宮に参籠。雨乞いすること三日、大雨降り来る、郡長大悦、神楽を奏し奉る、と明記している。これが、岩丸神楽の起源であると言ひ伝えられてはいる

が、真偽のほどは定かではない。江戸時代には神職によって舞われていた神職神楽であったが、明治初年神職世襲制度の廃止により中断された。

しかし、明治の中葉(中ごろ)、村中に神楽復興の機運が強まり、絶えていた神楽を復活するため、整理改定、創意工夫を加え、復興に力を注ぎ、明治二十七年から二十八年の日清の大戦の戦勝、同三十七年から三十八年の日露の役の大勝の後にも盛大裡に奉納して、戦勝報告、並びに日月清明、風雨以時、災害不起、国富安民、兵戈無用の天下泰平を祈念した事実が伝えられている。

大正の末期から昭和初期にかけての不況で、海外への移民や新たな職を求めて出郷する者が続出し、日中戦争、太平洋戦争に出征、戦傷死するなど、神楽講員は激減。わずかに老齢者二、三人を残すのみで、奏楽は不可能な状態となり、神楽の継続が危ぶまれていたが、岩丸地区の篤い庇護のもとに、昭和二十一年(一九四六)の春、在郷の青年十有余名で再復興した。

その後、再復興したときの神楽講員も高齢化のため、講員不足が懸念されたが、昭和五十年ごろ、当時の子どもたちに伝承し、現在にいたっている。

岩丸神楽の講員は、現在、老若合わせてわずかに十七人。町の行事や各地のイベントに参加し、それぞれの役割に応じ、各員各自の特色を発揮し、活躍している。(平成十一年十二月榎田町無形民俗文化財指定)

岩丸神楽の演目

式神楽

- 一、大祓い・神楽を始める前に神主役（講長）が祝詞をあげる。
- 二、供米撒き（一人舞い）・小原神楽「奠撒き」に同じ。
- 三、小神楽（四人舞い）・小原神楽「小神楽Ⅱ一の切り」に同じ。
- 四、しやうぎよう神楽（四人舞い）・小原神楽「小神楽Ⅱ二の切り」に同じ。
- 五、笹神楽（四人舞い）・小原神楽「手草」に同じ。
- 六、花神楽（四人舞い）・小原神楽「花神楽」に同じ。
- 七、劍神楽（六人舞い）・小原神楽「劍神楽」に同じ。
- 八、御先神楽（二人舞い）・小原神楽「御先神楽Ⅲ一の切り」に同じ。
- 九、岩戸神楽（五人舞い）・小原神楽「岩戸」に同じ。

特殊神楽

- 一、乱れ御先（二人舞い）・小原神楽「乱れ御先」に同じ。
- 二、銀杏神楽（三人舞い）・岩丸神楽二人の鬼が暴れ回り、おもしろい仕草で舞う。
- 三、綱御先（四人舞い）・小原神楽「綱御先」に同じ。
- 四、一人剣（一人舞い）・小原神楽「一人剣」に同じ。
- 五、盆神楽（二人舞い）・小原神楽「盆神楽」に同じだがリズム感があり、ややテンポが速い。
- 六、蛇神楽（六人舞い）・岩丸神楽で現在舞っている演目では最も有名で、三匹の大蛇がところせましとばかりに暴れ、稲田姫を飲み込もうとするとところを須佐之男命が大蛇に立ち向かい、これを退治

する。戦後
になって付
加されたと
思われる部
分が多く現
代的趣向が
取り入れら
れている。



蛇神楽

神楽の演目別衣装、面、小道具類

岩丸神楽

「面」の種類と数

・「四ツ鬼」Ⅱ青鬼、赤鬼、白鬼、黒鬼

- ・「御先驅」 御先面（赤）
- ・「蛇神楽」 素戔鳴命（白）・手名椎（白）・足名椎（淡黄）・櫛稻田姫（白）・姫（白）・火吹男（赤褐）
- ・「岩戸」 思兼神（淡黄）・布刀玉命（褐）・石凝姥命（褐）・天宇受売命（白）・手力男命（黒）
- 囃子用……胴長太鼓、横笛、鉦

岩丸神楽の口上

岩丸神楽詞

神名、および口上は前項の小原神楽とほぼ同じであるが、和歌の語尾、順番などが多少異なる。「御先神楽」のみを記す。

御先神楽

（天宇受売命・神主）

静かなれや静かなれや豊国の内なほ静かなれや御蔵の内神道地道多くとも中なる道は神の通ひ道

（猿田彦神・鬼神）

神路地路多くとも 中なる道は圓が通ひ道（圓は鬼の通ひ路）

（神主）

速浪ざや速浪葎や葎原の国の始の道は一筋

（鬼神）

知らずして 踏み迷いぬる神路山 今新まる道は一筋

（神主）

謹上再拜 謹上再拜 其の年月年号始めてより此の方国家安穩の為四季の御祭りを致さんと 本日

四方に御注連縄を張り ハツ橋ももどりつくえ八百万の神僕を飾り 其の内に八人の早乙女五人

の神神楽男の子を揃へ国家四民安全を加持人欲する所 是より丑寅に当り 悪風颯々と吹き来たり

赤き色なり 大蔵を好む 其れ我國は神国 道は是れ神道なり 国主は人皆神幸なり 汝何者の姿形を

現すも 此の神前に近づくこと不敬なり 速に此の境を退散せよ

（鬼神）

抑々御先と言ふは人と見ぬは道理なり眼は赤酸醬の如く 鼻は七尺 口隠れ三尺三寸の口切を以つて

梵丹を喰はんと欲するに似たり さらば容貌美なりと雖も 其の神性を知る可からず 一心狸々なる

に非ず 非風神力を持つて温順撥発の哀を現し 或時は木石木竹に身を変へ 前には赤き纏煙を掛け

腰には黒き紋を纏い 御杖を携げ 天地の間を飛行しむる国こそ多けれ（某当地）（豊前州 築上郡

椎田町大字岩丸字 宇豆の広前に太鼓 鞆鼓 笛 鼓 十二の楽を敷き 我が得手とくとふませんなどと

と謡へかなえ給へる事謂れなし 斯くの神事企る程の事なれば 三日先より荒神と現れこそまつり

四面八方の神器は許すまじく候

(神主)

御先の鬼に疑いなき 神宝五十鈴に生じて御神楽を奏し給へ

(鬼神)

畏つて候 げにげに神主の教へに任せ五十鈴を振り 修行しむれば 温順に生まれるによつて

御杖を渡し 御先に控え奉らん

(神主)

御杖を渡す御印に於て 天下泰平 国家安穩 五穀豊穰(某当所)の繁昌を舞ひ鎮め候へ

(鬼神) 畏つて候

三 湊神楽(みなとかぐら) Ⅱ 椎田町大字湊

椎田町湊地区は城井川河口近く、一部は周防灘沿岸に位置している。旧街道に沿って開けた町である。湊の氏神・金富(きんとみ)神社は地区の東端に社殿を有し、その昔、古くは「矢幡八幡」「湊八幡」「絹富八幡」などと呼ばれていたという。毎年二月の初卯の日には、前後に担ぎ棒を付けた台に神籬(ひもろぎ)を立て、これを奉じて村内をねり歩く「榊山神事」という古風な祭りが行われる。

この金富神社に奉納されていた神楽については、明確な記録や口伝はないようであるが、明治十九年(一八八六)の「築城郡内神社兼神楽方名簿」には「湊神楽」が記載されており、昭和八年の同記録には登録されて

いないことから早くに一時、途絶えていたのではないかと推察される。

また、昭和二十三年(一九四八)の「承認書を下附せられたる神楽講」にもその名称は見られないが、地元では隣の築城町赤幡神楽と協力しあつて神楽を続けていたといい、講員が少なくなったため、湊神楽講単独では活動ができなくなったのではないかと考えられる。これらのことから赤幡神楽と行動を共にする点はその伝承経路を暗示しているのではないだろうか。

今から十数年前、このままでは先祖伝来の湊神楽が消滅してしまうのではないか、是非とも復活させようと、当時の若者が中心となり、神楽講の先輩に教えを受け練習を始めた。その後も数人が加わり、正月や地区の文化祭などで全部の演目ではないが、一部の神楽を奉納している。

今後は、いかにして後継者を育てるかが大きな課題である。

湊(金富) 神楽の演目と所作・探物

式神楽

一、大祓祝詞

・神楽を舞い始める前に神主が祝詞をあげる。

烏帽子、狩衣、袴、Ⅱ神主

二、散米神楽(一人舞い)・小原神楽「食撒き」にほぼ同じ。

烏帽子、狩衣、袴、御幣、扇、米

三、折居神楽(四人舞い)・小原神楽「小神楽Ⅱ」の切り」にほぼ同じ。

四、御福神楽（四人舞い）・小原神楽「小神楽Ⅱの切り」にほぼ同じ。
鳥帽子、狩衣、袴、御幣、扇

五、手草神楽（四人舞い）・小原神楽「手草」にほぼ同じ。
鳥帽子、狩衣、袴、御幣、扇、笹

六、地割神楽（六人舞い）・小原神楽「剣神楽」にほぼ同じ。
毛頭、狩衣、襷、二股袴、御幣、扇、太刀

毛頭、襷、袴、太刀

鳥帽子、襷、袴、御幣、扇、Ⅱ神宣

七、神宣舞上げⅡ返拜Ⅱ（一人舞い）・地割神楽の後、神宣（神主）が舞い治める。
八、御先神楽（三人舞い）・小原神楽「御先神楽Ⅱ三の切り」にほぼ同じ。

毛頭、面、扇、仕官杖（しかんじょう・鬼杖）Ⅱ鬼

面、襷、袴、御幣Ⅱ神宣

九、花神楽（四人舞い）・小原神楽「花神楽」にほぼ同じ。
面、狩衣、袴、扇、御幣

十、四方鬼神楽（四人舞い）・四人の神が仕官杖（長さ一丈ほどの青竹の両端に切り紙を付けた棒）を絡ませり

ズム感たつぷりに舞う。

面、狩衣、裁着（たつつけ）袴、仕官杖

十一、戸前神楽（五人舞い）・基本的には小原神楽の「岩戸開き」や岩丸神楽の「岩戸神楽」と同じであるが、神五人のうち「伊斯許理度売命」がなく、その代わりに金富神社にちなんで「金富命」が入っている。

面、鳥帽子、狩衣、二股袴、御幣、扇Ⅱ思兼命

面、鳥帽子、笹Ⅱ太玉命

面、鳥帽子、狩衣、袴、弓矢Ⅱ金富命

面、鳥帽子、瓔珞、御幣、笹Ⅱ宇受売命

毛頭、面、襷、二股袴、御幣、扇Ⅱ手力男命

特殊神楽

一、湯立神楽（三人舞い）・小原神楽「湯立て」に同じ。

二、神迎え（二人舞い）・小原神楽「神迎え」に同じ。

鳥帽子、狩衣、袴、御幣Ⅱ神宣

面、綿シャツ、二股袴、鈴、引布Ⅱ鬼

三、綱御先神楽（四人舞い）・小原神楽「綱御先」に同じ。

面、鳥帽子、御幣Ⅱ神宣

四、三神神楽（三人舞い）

毛頭、面、狩衣、二股袴、御幣〓鬼
毛頭、狩衣、二股袴、袴〓綱引
毛頭、狩衣、袴〓綱引

毛頭、面、狩衣、綿シャツ、裁着袴、袴、袴笹〓山神

烏帽子、狩衣、袴〓海神

烏帽子、狩衣、袴〓野神

五、美須傳神楽（二人舞い）

烏帽子、狩衣、袴、御幣

六、四角手神楽（四人舞い）

七、盆神楽（二人舞い）・小原神楽「盆神楽」に同じ。

狩衣、袴、袴、御幣、扇、盆、米

八、大蛇神楽（六人舞い）・岩丸神楽「蛇神楽」と同じ。

九、綱切神楽

十、一人剣神楽（二人舞い）・小原神楽「一人剣」に同じ。

「面」の種類と数

・「御先」〓（赤）

・「花神楽」〓天細目女神（肌色）

・「戸前」〓天兒屋根命（肌色）

〓四方鬼神（赤）三面

・「綱御先」〓御先面と同じ（赤）

○囃子用……胴長太鼓、横笛、鉦

湊（金富）神楽の口上

奉納神楽

「託」は小原神楽とほぼ同じ。重複するため「大蛇神楽」と「三神神楽」のみを記す。

大蛇神楽 六人舞

（須佐之男命）

八雲立つ 出雲八重垣妻こめの 八重垣作るその八重垣の内

そこ座す汝等は何の誰ぞ

（手奈槌）

吾が名は手奈槌 妻が名は足奈槌 姫が名はもこめふすこし稲田姫と申す

（須佐之男命）

汝等の泣き悲しむ故は如何や

(手奈槌)

吾にも八乙女ありき 八岐の大蛇なるもの年々来りて取り喰ふなり 今又来り取り喰らはとす 故に泣き
悲しむなり

(須佐之男命)

大蛇なるものゝ姿いかにや

(手奈槌)

頭が八ツ 尾が八ツ 眼は赤がちの如く からだに杉桧おい茂り 八尾八谷にはい渡り 甚だはげし
き形ちなり

(須佐之男命)

大蛇なるもの打平らげん 姫を吾に奉らむや

(手奈槌)

畏こけれども尊の御名を知らず

(須佐之男命)

天照大御神の色背 須佐之男命なり

(手奈槌)

しかませば 畏し 命のまにまに姫を奉らむや

(樽昇 二人)

ヤシオリの酒

「方言にてヤシオリの酒 須佐之男の大蛇退治の説明」

(須佐之男命)

此の劍は天上高天原にて姉君の失ひ給ひし都牟賀利の太刀 是を姉君に献じ奉る

三神神楽 三人舞

(山神)

櫛葉や 太刀も袖の追風に なびくは神の心なるらむ

(農神)

豊国の 山田の原に植えし田を かりておさむる伊勢の神垣

(海神)

伊勢海 宵か原の浪間より あらはれ出づる住吉の松

(山神)

そもそも此の三神の遊びと云ふは いく昔天照大御神が天の岩戸にとじ籠り給ひし時に 天思兼命
天太玉命 天宇豆女命達が 上ツ枝に八咫の御鏡をかけ 中ツ枝には御統笛の玉を飾り 下ツ枝には白和幣
宵和幣を取垂らして 是をも大神宮に献し奉る

四 上り松神楽（あがりまつかぐら） Ⅱ 椎田町大字上り松

元々上り松地区には神楽講はなかったが戦前、地区の春の神幸祭や秋祭りの際、ひと山隔てた隣の小原神楽講が上り松正八幡宮に神楽奉納に来たとき、上り松の青年数人が見よう見まねで一緒に神楽を舞ったという。

その後、昭和二十六、七年ごろ、上り松にも神楽講を作ろうという機運が高まり、当時の青年たち約十人が立ち上がり、地域一体となつての「上り松神楽」が組織された。当然のことながら神楽衣装や面、扇、刀など道具類一式を各戸が資金を出し合い買い揃え、また、婦人会の人たちが裁縫し、小原神楽講から一通りの神楽を習得、地区の祭りなどで上り松正八幡神社に奉納していた。

しかし、十年ほどたつてから講員が次々に仕事のため町外へ転出、地元に残つた講員は五、六人で、単独での神楽活動はできなくなった。このころから実質小原神楽講と「合併」、活動をしている。また、平成七年（一九九五）から新たに四人の講員が加わり、小原神楽講と行動を共にし、地元をはじめ、町内各地区、近隣市町村の祭りや各種イベントに参加し活躍している。

なお、衣装や道具類は当時のまま保存している。現在の講員は七人。

五 神名

神楽で使われる神楽講、及び「古事記」との神名の比較表

神楽に登場する神名は、読み方は同じでも神楽講によつては漢字が異なる。神楽講ごとに比較してみた。

神 楽 講									
10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
手 タテ 力 チカラ 男 オトコ 命 イナ	天 アマ 宇 ウ 受 ウケ 売 ウレ 命 イナ	伊 イ 斯 ス 許 コ 理 リ 度 ド 売 ウレ 命 イナ	思 オモ 金 カネ 命 イナ	太 タ 玉 タマ 命 イナ	埴 ハ 安 ヤス 神 カミ	水 ミヅ 花 ハナ 売 ウレ 神 カミ	金 カネ 山 ヤマ 彦 ヒコ 神 カミ	迦 カ 具 グ 土 ツチ 神 カミ	久 ク 々 々 能 ノ 智 チ 神 カミ
手 タテ 力 チカラ 男 オトコ 命 イナ	天 アマ 宇 ウ 受 ウケ 売 ウレ 命 イナ	石 イシ 凝 コウ 姥 ババ 命 イナ	思 オモ 兼 カネ 神 カミ	布 フ 刀 タガ 玉 タマ	埴 ハ 安 ヤス 比 ヒ 古 コ 神 カミ	彌 ミ 都 ツ 花 ハ 能 ノ 賣 ウレ 神 カミ	金 カネ 山 ヤマ 比 ヒ 古 コ 神 カミ	柯 カ 遇 ユ 突 ツ 智 チ 神 カミ	勾 コウ 々 々 遇 ユ 馳 チ 神 カミ
手 タテ 力 チカラ 男 オトコ 命 イナ	天 アマ 宇 ウ 受 ウケ 売 ウレ 命 イナ	金 カネ 富 フ 命 イナ	思 オモ 兼 カネ 命 イナ	太 タ 玉 タマ 命 イナ	埴 ハ 土 ツチ 安 ヤス 神 カミ	水 ミヅ 花 ハナ 根 ネ 神 カミ	金 カネ 山 ヤマ 彦 ヒコ 神 カミ	火 カ 具 グ 槌 ツチ 神 カミ	木 キ 々 々 奴 ヌ 知 チ 神 カミ
天 アマ の ノ 手 タテ 力 チカラ 男 オトコ の ノ 神 カミ	天 アマ の ノ 宇 ウ 受 ウケ 売 ウレ の ノ 命 イナ	伊 イ 斯 ス 許 コ 理 リ 度 ド 売 ウレ の ノ 命 イナ	思 オモ 金 カネ の ノ 神 カミ	布 フ 刀 タガ 玉 タマ の ノ 命 イナ	波 ハ 運 ウン 夜 ヤ 須 ス 見 ミ 古 コ の ノ 神 カミ	弥 ミ 都 ツ 波 ハ 能 ノ 売 ウレ の ノ 神 カミ	金 カネ 山 ヤマ 見 ミ 古 コ の ノ 神 カミ	火 カ の ノ 迦 カ 具 グ 土 ツチ の ノ 神 カミ	久 ク 々 々 能 ノ 智 チ の ノ 神 カミ

神名 (五十音順)

あー 阿加流比売の神・飽咋之宇斯の神・秋見売の神・秋山之下米丈夫・葦那陀迦の神・足名椎・葦原の色
 許男の神・阿須波の神・阿遲宇劬高日子根の神・淡道之穂之狭別・天津国玉の神・天津久米の命・天津日
 子根の神・天津日高日子波限建鸕草葺不合の命・天津日高日子穗手見の命・天津麻羅・天照大神・
 天之石門別之神・天之宇受売の命・天之忍日の命・天之忍穗耳の命・天之迎久の神・天之児屋の命・天之
 佐具売・天の手力男の神・天知迦流美豆比売・天の鳥船・天運岐志国運岐志天津日高日子番運邇芸の命・
 天之忍許呂別・天之忍男・天之久比耆母智の神・天之間戸の神・天之狭霧の神・天之狹土の神・天之狭手
 依比売・天之都度間知泥の神・天之常立の神・天之吹男の神・天之冬衣の神・天之菩卑の神・天之御影の
 神・天之瓊主の神・天之水分の神・天之御中主の神・天之尾羽張・天一根・天比登都柱・天の日腹の大科
 度美の神・天の阿屋・天の日明の命・天之御虚空豊秋津根別・天の若日子・阿夜訶志古泥の神・阿和佐久
 御魂・沫那芸の神・沫那美之神・青沼馬沼押比売
 いー 活代之神・活玉前玉比売の神・活津日子根の神・伊奢沙和氣の大神の神・伊耶那岐の神・伊耶那美の
 神・伊斯許理度売の命・市寸嶋比売の命・伊豆志の八前之大神・伊豆志袁登伊の神・五瀬の命・伊豆能売・
 伊都之尾羽張・稲田の宮主須賀之八耳の神・稲羽の八上比売・稲泳の命・伊怒比売・石押分之子・石析の
 神・石巢比売の神・石土里古の神・石筒之男の神・石長比売・飯依比古
 うー 宇迦之御魂の神・菟神・宇都志国玉の神・宇都志日金析の命・上簡之男の神・上津綿津見の神・宇比
 地邇の神・宇摩志阿斯訶備比古遲の神・蛤貝比売

えー 愛比売

おー 淤迦美の神・奥疎の神・奥津甲斐弁羅の神・奥津嶋比売の命・奥津那芸佐毘古の神・奥津日子の神・
 奥津比売の命・奥山津見の神・淤膳山津見の神・大穴牟遲の神・大雷・大香山戸臣の神・意富加牟豆美
 の命・大國主の神・大國御魂の神・大氣都比売の神・大宜都比売・大事忍男の神・大多麻流別・大土の神・
 大年の神・意富斗能地の神・大斗乃弁の神・大戸日別之神・大戸或子の神・大戸或女の神・大直見の神・
 大野手比売・大戸比売の神・大禍津日の神・大物主の神・大屋毘古の神・大山咋の神・大山津見の神・大
 綿津見の神・淤美豆奴の神・於母陀流の神・思金の神

かー 香山戸臣の神・香用比売・風木津別之忍男の神・金山毘古の神・金山毘売の神・神阿多都比売・神活
 須毘の神・神大市比売・神直見の神・神産巢日の神・神屋櫛比売の命・神倭伊波礼毘古の神・迦毛の大神
 神・鹿屋野比売の神・櫛の神

きー 蛭貝比売・木俣の神

くー 久延見古・久々紀若室葛根の神・久々年の神・久々能智の神・櫛石窓の神・櫛名田比売・櫛八玉の神
 ・國忍富の神・國之久比耆母智の神・國之間戸の神・國之狭霧の神・國之狹土の神・國之常立の神・國之
 水分の神・熊野久須毘の命・關添加美の神・關御津羽の神・關山津見の神・黒雷

けー 氣比の大神

こー 事代主の神・木花知流比売・木花之佐久夜毘売
 さー 析雷・刺国大の神・刺国若比売・佐土布都の神・佐比持の神・塞ります黄泉つ戸の大神・狹依毘売

の命・猿田毘古の神・橋根津日子
 し・志芸山津見の神・敷山主の神・下光比売の命・志那都比古の神・塩椎の神・白日の神・白日別
 す・少名毘古那の神・須勢理毘売・須比智邇の神
 そ・底筒之男の命・底津綿津見の神・底度久御魂・曾富理の神
 た・高木の神・高比売の命・高御産巢日の神・多岐都比売の命・多紀理毘売の命・建速須佐之男の命・建
 日方別・建日向日豊久士比泥別・建比良鳥の命・建日別・建布都の神・建御雷之男の神・建御名方の神・
 建依別・多比理岐志麻流美の神・玉祖の命・玉依毘売
 ち・道反之大神・道敷の大神・道侯の神
 つ・衝立船戸の神・月読の命・土雷・土之御祖の神・角杙の神・都夫多都御魂・類那芸の神・類那美の
 神
 て・手名椎
 と・時量師の神・鳥取の神・遠津待根の神・遠津山脚多良斯の神・戸山津見の神・登由氣の神・豊石窓の
 神・豊宇氣毘売の神・豊雲野の神・豊玉毘売・豊日別・豊布都の神・豊御毛沼の命・鳥之石楠船の神・鳥鳴
 海の神
 な・中筒之男の命・中津綿津見の神・泣沢女の神・鳴女・夏高津日の神・夏之売の神・鳴雷
 に・庭高津日の神・庭津日の神・贊持之子
 ぬ・沼河比売・布忍富鳥鳴海の神

ね・根柢の神
 の・野椎の神
 は・波邇夜須毘古の神・波邇夜須毘売の神・波比岐の神・速秋津日子の神・速秋津比売の神・羽山津見の
 神・羽山戸の神・速邇之多氣佐波夜遅奴美の神・原山津見の神・春山之隠丈夫
 ひ・日河比売・聖の神・日名照額田毘道男伊許知邇の神・比那良志毘売・火之炫毘古の神・火之邇具土の
 神・火之夜芸速男の神・極速日の神・比々羅木之其花麻豆美の神・水蛭子
 ふ・深淵之水夜礼花の神・伏雷・布都の御魂・布帝耳の神・布刀玉の命・布怒豆怒神・布波能母遅久奴
 須奴の神
 へ・辺疎の神・辺津甲斐弁羅の神・辺津那芸佐毘古の神
 ほ・火の雷・火須勢理の命・火照の命・火速理の命
 ま・前玉比売・悪事も一言善事も一言言離の神葛城の一言主大神・正勝吾勝々速日天之忍穗耳の命・正鹿
 山津見の神
 み・甕主日子の神・甕速日の神・甕布都の神・御倉板拳の神・御食つ大神・御毛沼の命・道之長乳齒の神
 ・弥都波能売の神・弥豆麻岐の神・御年の神・美呂浪の神・御井の神
 や・八河江比売・八嶋士奴美の神・八嶋牟遲の神・八十禍津日の神・八千矛の神・八重言代主の神・山末
 之大主の神・山田の曾富騰
 よ・黄泉つ神・黄泉津大神・予母都志許売・万幡豊秋津師比売の命

わ・若雷・若沙那売の神・若尽女の神・若年の神・若御毛沼の命・若山咋の神・和久産巢日の神・和豆良比能宇斯の神
る・井氷鹿 以上

第二節 椎田町の楽

一 高塚楽（たかつかがく） 椎田町大字高塚

由来

高塚楽の資料が集められるようになったのは、ここ十年前からのことである。それまでは全く何の由来も伝承されていなかった。

そのような状況の中で、高塚楽の特徴として

○「南無阿彌陀仏」の念仏が入っている。

○「まんだら」（曼陀羅）という項目がある。

○高塚楽は念仏楽であるという古老の話

などのことから推測して、高塚楽は世間一般の神式的な楽とその質を異にしているので、仏教宗派のある

様式から発展・伝承されたものではないかと思われる。そんな折、今から十年ほど前、高塚地区の旧家から一枚の古文書（高塚村御楽証哥扣）が発見され、高塚楽の歴史の一部が明らかにになった。

これを発端にして高塚楽の研究が始まり、以下の関係資料が集まり、推測ではあるが、高塚楽の輪郭を把握することができる。

また、笛や鉦などの囃子は平成期に入ってから、後世に正しいものを伝承するため、幸いなことに高塚楽の囃子の録音テープが残っていたので、それを基に笛と鉦の楽譜を作成した。テープに聞き取りにくいところがあるので、完全とまではいかないが、今後のためにはよい資料になるであろう。楽譜は西洋音符で表現しているので、各小節は笛を吹きやすいように適当に区切っている（平成十一年十二月、椎田町無形民俗文化財指定）。

現状

楽打日

・五月五日（神幸祭）・七月二十五日（夏祭り）

楽打場所

・神幸祭

一、氏神 網敷天満宮神幸御輿の御旅所お立ちの楽（公民館）

二、神社に還御されてお着きの楽（浜宮の大燈籠の前で半分、天満宮拝殿の前で半分、楽打ち）

2006.01.13

福岡県教育庁文化財保護課蔵書

47154

椎田町史 民俗編

平成十七年十月三十一日発行

編集 椎田町史編纂委員会

発行 椎田町

〒八二九一〇三九二
福岡県築上郡大字椎田八九一―二
電話 〇九三〇(五六)〇三〇〇

印刷 明治印刷株式会社

大分県宇佐市長洲六〇七